

私が高等小学校二年のときであった。理科担任の河野校長先生が二包みの薬品をもってきて私を呼び出し、「これを静かに混ぜなさい」といわれた。私も工場で父親たちが雷薬を混合しているのを見ていたので、そのようにそつと白い薬品と暗赤色の粉末を混合して、先生に「このくらいの混りかたでいいですか」と差し出すと先生はそれを茶色の封筒に入れ、教壇の上に小さい板をおいて、その上にその封筒をのせた。先生は用意していた金槌を振り上げて封筒の包みを打った。ドーンと耳をつんざく爆音がして、爆煙が天井までもうもうとあがり、生徒一同度肝を抜かれたのだが、その煙のなかから先生はニコニコしながら顔を現わしたのであった。そして「さつき細谷の混ぜたのは塩素酸カリウムと赤リンである」といわれ、マツチの軸木と箱の摩擦薬のおもな原料であることを、わかりやすく話されたのであった。

小学校を卒業して四、五年後、東京の浅草蔵前の山縣源七商店の主人から通称「投げ花」といわれる五色のテープをみせられ、「テープをこのように投げると伸びていくがこれを花火でできないか」といわれた。そのとき思い出したのは、あの赤リンと塩素酸カリウムであった。乾燥した薬品そのままでは取り扱いも危険で自然発火の心配もあるので、塩素酸カリウムをアラビアゴム溶液で練り、それに三硫化アンチモンを入れるとこれだけで爆薬になるが、発火しやすくするために赤リンを五パーセントくらいに加え、木綿糸の折り曲げたところに、耳かきくらいの竹べらで○・○三グラムくらいを附着させ、長方形に切断した更紙を巻き付けて、これを五色テープの発射薬とした。図一のように筒の中央から下部に段をつくり、厚い円形のボール紙に発射薬の木綿ヒモを通し、下方で糸をひけば発射薬が爆発する。筒の上部に薄紙の五色テープをおく棚を設け、テープの上を紙で蓋をし、外側はクレップ・ペーパーで外観よく仕上げてサンプルをつくった。山縣源七商店へもっていき試験をしたとこ

ろうまくいき、山縣さんは狂気して喜び、何万ダースでもできるだけ売るからつくってくれ、といわれた。そこで内職の人三百軒を頼むなど大車輪をかけてつくった結果品物は飛ぶように売れたのであった。これがクリスマス・クラッカーである。

私どもの細谷火工の基礎をつくったヒット商品だが、それも現在は故人になられた五色テープをみせてくれた山縣さんと糸鉄砲のヒントを与えてくださった河野校長先生のおかげと心から感謝をしている。

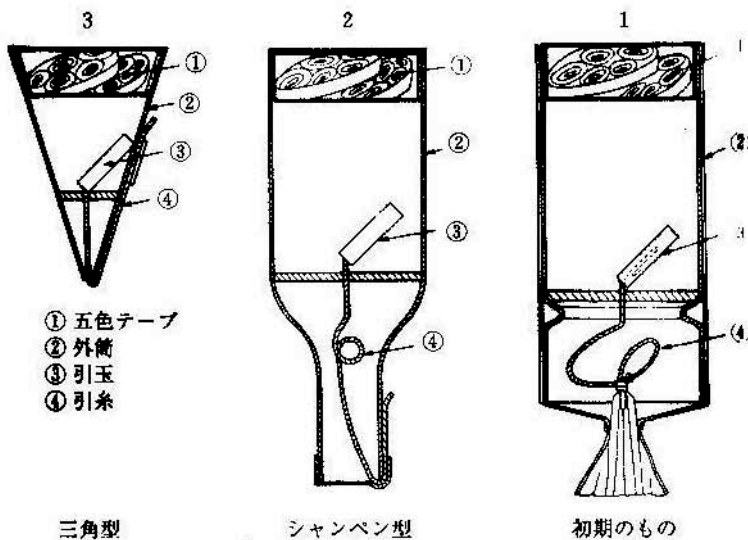


図1 クリスマス・クラッカー断面図